

～さっぽろ・消えた町角～

日本放送作家協会北海道支部長 朝倉 賢

大都市を泳ぐサケ

北海道の川に秋鮭がのぼって来る季節になった。札幌の中心を流れる豊平川でも、時折魚影を眺めることができるらしい。真駒内にかかる五輪大橋のすぐ下流に、サケの科学館があって、一年を通じてサケの生態を観察できるし、春には稚魚の放流も盛んにやっているから、何年かたって成魚となり、故郷の豊平川に戻って来るわけだが、大都会のど真中を流れる川にサケが戻るのは、本当にうれしい事だ。

私が豊平川で初めてサケを見たのは、六十年以上前の昔、終戦の前の年のこと。場所は幌平橋の下流、右岸の精進川と合流をする水門のある辺りだった。浅瀬の石の間を、身をくねらせながら上流に向っていた。実はその頃は極端に食べ物が不足していた時代だった。誰もが一日じゅうハラを減らしていた。「サケをつかまえたい。喰いたい」夢中で川に入って手どりにしようとして追いかけた。でも、つかまるはずがない。川底の石につまづいてびしょ濡れになって、しおしおと家に戻った。

終戦後サケは豊平川にのぼらなくなってしまった。沖や河口で漁りつくしたせいもあったろうし、札幌の人口がどんどんふくれ上がって川の汚染がひどくなったことが一番の理由だったのかもしれない。その汚染原因の第一号は真駒内につくられた米軍のキャンプしあった。ここにつくられた占領軍の兵舎は、全て水洗トイレだった。街なかの市民の家は一軒一軒が汲み取り式だったのに対し、さすがアメリカ軍は水洗式。ただし、その水は浄化されず、そのまま豊平川に放流されていたのだった。だから、当時の小中学生の楽しみだった水遊びも衛生上の理由で禁止になってしまった。

水洗トイレが市内全戸に普及し下水道処理場で浄化されるようになるには、札幌オリンピックまで待たなければならなかった。豊平川汚染の第一号だった真駒内そばに、浄化のシンボルでもあるサケ科学館ができてるのはちょっと皮肉な感じもする。川もまた歴史をうつす鏡、水鏡である。